携帯のマナー意識に関する研究

～高知工科大学生を対象として～

1170468　　廣川　胡桃
高知工科大学マネジメント学部

1.　概要

現在，携帯の普及により携帯所持年齢の低年齢化が進んでいる．2013 年の内閣府の調査によると，小学生の携帯の所持率 36.6%，中学生の携帯の所持率 51.9%，高校生の携帯の所持率 97.2%である．一方，渡邊等によると大学生の携帯の所持率は 99.3%である[1]．このようなデータから分かるように若者の携帯所持率は高く，若者にとって携帯を持ち歩くことが当たり前の時代になっている．しかし，一方で若者の携帯マナーが社会的に問題になっている．しかし，上述の渡邊等の研究[1]では携帯マナーに関して言及されていない．よって，本研究では，携帯マナーの守れていない若者の現状の把握のために，高知工科大生を対象に携帯マナーの認知度や理解度，重要度をアンケートから分析し，分析結果から今後の対策案を提言する．

2.　背景

携帯の所持増加に伴い，社会的に若者の携帯マナーが守られていないことが問題視されている．例えば，2016 年 7 月のポケモン GO の配信により歩きスマホや自転車や自動車の運転中の携帯の使用に大変危険性高いと毎週のように報道されていた．しかし，上述の渡邊等の研究[1]では，情報化社会の中で安全に楽しく暮らすためには，うまく賢く情報を選択し活用できるメディアリテラシー教育とメディアの使用ルールやマナー教育を携帯の所持低年齢化より早い段階からの必要であるという考察で留まっている．そのため，その携帯マナーに関して言及されていない．

3.　目的

本研究では，携帯マナーを高知工科大学生が守れているか現状の把握を行い，その現状の分析を用いて携帯マナーを向上させるための改善策を提言することを目的とする．

4.　先行研究

先行研究として，渡邊等の研究[1]がある．そこでは，中・高・大学生の携帯電話の使用状況と生活環境への影響を知るために，中学生 245 人，高校生 461 人，大学生 282 人にアンケート調査を行っている．その結果から，9 割以上の高校生や大学生が毎日携帯を持ち歩くことが分かった．そして，公の場で携帯の使用の説明を受けたことがあるのは中学生が最も高いことが分かった．そして，情報化社会の中で安全に楽しく暮らすためには，うまく賢く情報を選択し活用できるメディアリテラシー教育とメディアの使用ルールやマナー教育を携帯の所持低年齢化より早い段階からの必要であるという考察で留まっている．

5.　研究方法

今回の主な研究方法は，まずは，高知工科大生にアンケート調査を行う．調査を行うに当たって，携帯マナーが守られるということは，携帯マナーを知り（認知度），理解し（理解度，重要度）そして守られる（実施率）という手順の仮説立てた．その調査結果に対して，単純集計，クロス集計，そしてχ２検定を行うことによって統計的に有意か確認を行う．その確認後，高知工科大生の携帯マナーの現状や改善案について考察を行う．

6.　アンケート調査

本研究では調査に当たって，携帯マナーとは，携帯使用者が行うべき他者への配慮と定義する．他者への配慮は，携帯使用者が属している空間によって異なるとする．そのため，他者への配慮すべき空間として，公的空間（公共の場）と私的空間（プライベート空間）に二分類する．ここで，公的空間の携帯マナーとは，公に開かれた空間内の現実で関わる他者への配慮と定義する．一方，私的空間の携帯マナーとは，自分が支配できる空間内に於いてインターネット上での他者への配慮と定義する．

問5　初めに提示した携帯マナーの一覧から，あなたが携帯マナーを守っているか，守っていないか、下に記載された表の当てはまる個所に，丸を付けてください．

携帯マナーの一覧の番号

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
守っている												
守っていない												

図 1　アンケート質問例

公的空間の携帯マナーとしては，以下の 8 つを対象とする．

1. 歩道での歩きスマホ
2. 自転車や自動車の運転中の携帯
3. 新幹線・電車・バス内の携帯のマナーモード
4. 病院や飛行機での携帯の電源オフ
5. 著作権に関わる写真撮影
6. ホテルのロビーなどの静かな場所での電話
7. 劇場・美術館・映画館・図書館の携帯の電源オフ
8. 駅内や繁華街での自撮り棒の使用

一方，私的空間の携帯マナーとしては，以下の 4 つを対象とする．

9. インターネット(SNS 等)で誹謗中傷する行為
10. インターネット(SNS 等)で個人情報を流出する行為
11. インターネット(SNS 等)でプライバシーや著作権を侵害する行為
12. インターネット(SNS 等)からのカンニング行為(レポートのコピー＆ペースト　含)

これらの携帯マナーの具体例に基づいて，アンケートを作成した(図 1)．本研究でのアンケートの配布期間は，2016 年 1 月 27 日と 1 月 30 日である．そこでは，362 人に対して，無記名自記式で調査を行った．その結果，有効回答数は 230 人であり，有効回答率は 63.53%であった．

7.　集計結果

本章で述べる比率は，χ 2 検定より有効であったことをまず述べておく．はじめに，実施率についての集計結果は，図 2～4 に示す通りである．そして，守っていない人を対象に，それぞれの携帯マナーが守れていない理由を調査した(図 5)．携帯マナーが守れていない理由として，認知していなかったことよりも理解していなかったという原因が分かった．その理解できていない携帯マナーの重要度を調査した(表 1)．重要度を比較するためのスコアの出し方は，第一位を選んだ人数×5，第二位を選んだ人数× 4 という様に加重計算を行い，それぞれの順位別の結果を合計したものである．携帯マナーの実施率向上のための改善案を構築するために，全被験者に他者から携帯マナーの説明を受けているか調べた結果は，表 2～4 に示す通りである．そして，携帯マナーが守られるための対策案として効果的であると思うものを調査した(表 5)．加えて，対策案として提示した携帯マナーの講習の賛否の意見を調査した(表 6)．

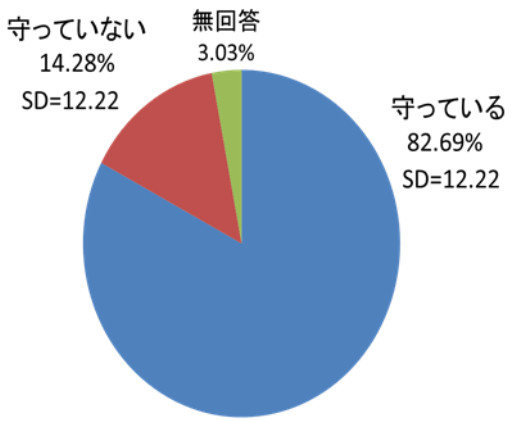

図 2　全体の比率の平均　(実施率)

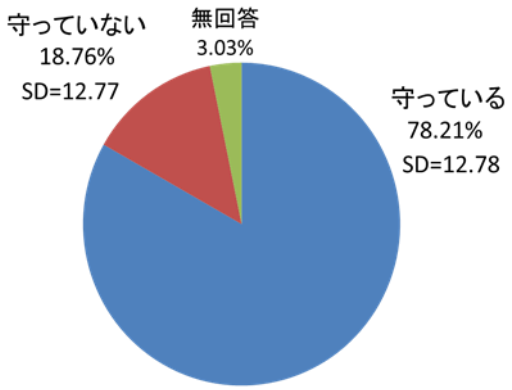

図 3　公的空間の携帯マナーにおける比率の平均(実施率)

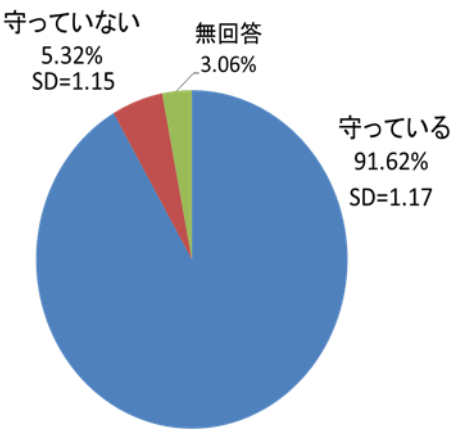

図４　私的空間の携帯マナーにおける比率の平均(実施率)

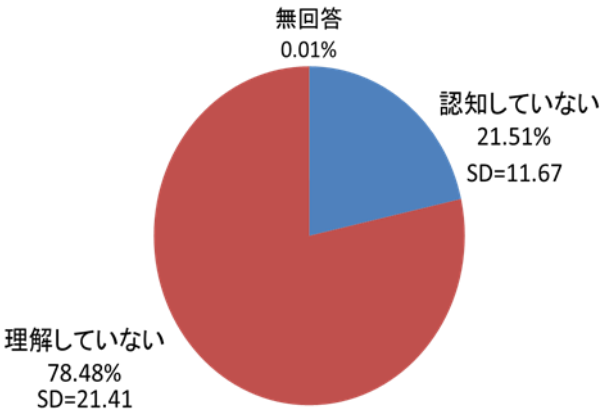

図５　全体の比率の平均　(守れていない理由)

表１　携帯マナーの重要度のランキング

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	スコア
1	14 (6.08%)	39 (16.95%)	21 (9.13%)	8 (3.47%)	19 (8.26%)	324
2	85 (36.95%)	30 (13.04%)	17 (7.39%)	22 (9.56%)	15 (6.52%)	655
3	1 (0.43%)	7 (3.04%)	12 (5.21%)	9 (3.91%)	14 (6.08%)	101
4	30 (13.04%)	19 (8.26%)	13 (5.65%)	24 (10.43%)	15 (6.52%)	328
5	3 (1.30%)	8 (3.47%)	22 (9.56%)	22 (9.56%)	35 (15.21%)	192
6	0 (0%)	4 (1.73%)	2 (0.86%)	6 (2.60%)	9 (3.91%)	43
7	2 (0.86%)	3 (1.30%)	11 (4.78%)	5 (2.17%)	15 (6.52%)	80
8	2 (0.86%)	3 (1.30%)	2 (0.86%)	3 (1.30%)	4 (1.73%)	38
9	18 (7.82%)	23 (10%)	31 (13.47%)	33 (14.34%)	23 (10%)	364
10	47 (20.43%)	43 (18.69%)	45 (19.56%)	34 (14.78%)	17 (7.39%)	627
11	12 (5.21%)	40 (17.39%)	37 (16.08%)	36 (15.65%)	30 (13.04%)	433
12	9 (3.91%)	4 (1.73%)	10 (4.34%)	21 (9.13%)	26 (11.30%)	159
無回答	7 (3.04%)	7 (3.04%)	7 (3.04%)	7 (3.04%)	8 (3.47%)	

表２　携帯マナーの説明の有無

受けた	受けていない	分からない	無回答
116 (50.43%)	68 (29.56%)	45 (19.56%)	1 (0.43%)

表３　どこで携帯マナーの説明を受けたか

携帯ショップ	6 (5.17%)
学校	100 (86.20%)
市町村、県主催の講習	4 (3.44%)
警察	2 (1.72%)
保護者	3 (2.58%)
その他	1 (0.86%)
無回答	0 (0%)

表４　携帯マナーの説明を受けなかった理由

知らなかった	38 (55.88%)
面倒だった	3 (4.41%)
携帯マナーを理解していた	16 (23.52%)
時間がなかった	1 (1.47%)
講習が有料だった	0 (0%)
面白くない	0 (0%)
交通の便が悪い	0 (0%)
パンフレットをもらった	1 (1.47%)
その他	8 (11.76%)
無回答	1 (1.47%)

表５　実施率向上の対策案

携帯マナーの講習	87 (16.95%)
該当する場所でポスターやチラシの掲示・配布	54 (10.52%)
親の教え(家庭)	128 (24.95%)
教員の指導(学校)	100 (19.49%)
呼びかけ(地域)	44 (8.57%)
テレビやCMの放送	77 (15.00%)
その他	20 (3.89%)
無回答	3 (0.58%)

表６　携帯マナーの講習の賛否

賛成	反対	無回答
179 (77.82%)	44 (19.13%)	7 (3.04%)

8. 考察

アンケートの分析結果から，まず，携帯マナーの認知度や理解度の現状把握を行う．図 2～4 より，携帯マナーの実施率は，守っている 82.69%，守っていない 14.28%であった．公的空間の携帯マナーを守っている比率は 78.21%，私的空間の携帯マナーの守っている比率は 91.62%であった．この結果から，公的空間の携帯マナーよりも私的空間の携帯マナーの方が守られていることが分かった．図 5 より，それぞれの守っていない携帯マナー別に守っていない理由を調査した．守っていない理由として，認知していない 21.51%，理解していない 78.48%であった．この結果は，公的空間の携帯マナーと私的空間の携帯マナーに差はなく，どれも認知度より理解度の方がないことが分かった．

上述のように私的空間の携帯マナーの実施率より公的空間の携帯マナーの実施率の方が低いことが分かった．そのため，公的空間の携帯マナーの理解度を高めるための教育を行うことで，全体の携帯マナーの実施率が効率的に上がるのではないかと推測できる．さらに，表 1 より，それぞれの携帯マナーの重要度を，第 5 位までランキングを付けてもらう形式で調べた．重要度が一番高いのは，自転車や自動車の運転中の携帯の使用であった．逆に，重要度が一番低いのは，駅内や繁華街での自撮り棒の使用であった．順位付けした全体の結果から，公的空間よりも私的空間の携帯マナーの方が，重要度が高いことが分かった．

次に全被験者に対し他者からの携帯マナーの説明や教育歴に関する現状把握を行う．全被験者に聞くことで携帯マナーを守れている経緯を知ることが出来るため，携帯マナーの実施率向上のための改善案の作成に役立てることが出来る．表 2～4 より，携帯マナーの説明を受けたことがある人は 50.43%で，受けたことがない人は 29.56%であることが分かった．その中で，携帯マナーの説明を受けた人は，学校 86%が最も多かった．この結果から，携帯マナーの説明を行う場所は学校が主であり，携帯の購入時や市町村，県主催の講習や警察，保護者から携帯マナーの説明を受けることは少ないことが分かった．その他の回答として，町の広告が挙げられている．さらに，携帯マナーの説明を受けなかった理由として，知らなかった 56%，携帯マナーを理解していた 24%という結果から，携帯マナー説明を受ける前に講習の認知度が低いことが分かった．その他の具体例として，興味がなかったことや，機会がなかったことや，マナーを知っていたこと，そのような講習の場所に行かなくても，分かっていた，携帯マナーは親や指導者に教わるものであるという意見があった．携帯マナーが守られるためにはどのような対策が効果的であると思うか表 5 より分析した．携帯マナーの講習 17%よりも家庭での親の教え 25%の方がより効果的であるという結果になった．親の教えの次に学校での教員の指導 19%となっている．この結果から，携帯マナーが守られるためには，親が子に対しての指導することが効果的である，つまり携帯マナーが守られるためには家庭でのしつけが必要であると分かった．その他の具体例として，マナー違反し注意を受ける，自分で意識する，条例・法律を制定による規範意識の向上させる，友達の言葉から守るように促す，メディアによる印象操作，アプリの広告に掲示する，携帯に携帯マナーを教える機能を付ける，SNS 等の広告を載せる，マナー違反の当事者の話を聞く，携帯のシステム面での規制強化(例．インターネットを見ている時にマナー違反を感知すると警告メッセージが表示される等)，マナー違反者に罰金を設ける・罰を与える等が挙げられた．表 6 より，携帯マナーの講習について賛否の意見を問うた．携帯マナーの講習に賛成する人は 78%，反対する人は 19%であることが分かった．自由意見では，賛成意見として携帯マナーについての知識が身に付く，携帯マナーを改めて見返すことが出来る，携帯マナーの理解が深まる等が多数あった．何もしないよりは，携帯マナー講習を実施した方が良いという意見も多数あった．逆に，反対意見では，マナーを守るかは本人の意識次第である，時間の無駄(守らない人は講習を聞いていない)，講習は一方的で飽きる，講習の強制力がない，講習をするほどではない等という意見が多数あった．アンケートの最後に携帯マナーについての意見を聞いた．自由回答のため，様々な意見があったので，ここではその中でも多かったものを紹介する．時代によって変化するから、携帯マナーを言い続けることが大事，日本全体で携帯マナーを守らない人が増えている，私的空間のマナーが守られていないと感じる，命に関わる携帯マナーもあるので徹底すべき，携帯マナーはどこまで OK でどこから OUT かの線引きの判断がつきにくい，マナーに強制力はないから守られない，携帯マナーが守られるためには罰金・罰則が必要である，マナーを守る意識付け

が必要である等の様々な意見が挙げられた．この結果から，携帯マナーの重要度は高いと言える．

本研究では，携帯マナーが守られるようになるための改善策として，携帯マナー教育の実施が必要であると提言する．携帯マナー教育の実施時期は，携帯を持ち始める時期として一番多かった高校一年生の時に行う．しかし，ただ一方的に講習を行うことは携帯マナーに意識が向かず効果が期待出来ない．よって，実際にシュミュレーションを行い，受講者がマナー違反を犯した時に起こりうる危険な予測を体験させることが考えられる．携帯マナーの講習内容や受講者の意欲向上を図る工夫が必要であると考察できる．重要度の低い自撮り棒の使用方法など、携帯マナーとして流行り廃りが存在するため，随時携帯マナー教育を行わなければならないことから，携帯マナーの講習も欠かせない。それに加え，携帯マナーにとって上記親から子への教育も必要であることから，保護者に対する教育も必要であると考えられる．

9. 結論

先行研究では言及していなかった携帯マナーについて本論文で初めて研究を行った．それを通して以下のことが言える．公的空間と私的空間に分類した分析のためのフレームワークを初めて提案した．そのフレームワークに従った結果，実態に則した効果的な携帯マナーの教育の在り方を提言することができた．

一方，今後の課題としては，本研究で提案した携帯マナー教育を実施し，その結果の検証を行うことである．

引用文献

[1]『平成 25 年度青少年のインターネット利用環境実態調査』http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h25/net-jittai/html/2-1-1.html，内閣府，平成 26 年 3 月

主な参考文献

[1]渡邊典子、久保田美雪、石崎トモイ、小柳恭子：『中・高・大学生における携帯電話の使用状況と生活環境への影響に関する調査』，　新潟青綾大学紀要　第８号，2008 年 3 月

[2]鎌田浩子、高橋尚子『大学生のパソコン・携帯電話利用の現状と課題』，釧路論集－北海道大学釧路校研究紀要－第３８号，2006 年

[3]大村平：『統計のはなし - 基礎・応用・娯楽 - 』，日科技連出版社，1999 年 8 月 30 日発行

[4]NTT docomo：『携帯電話のマナー』https://www.nttdocomo.co.jp/info/manner

[５]東京ディズニーリゾート：『皆様の笑顔と安全のために』http://www.tokyodisneyresort.jp/guide/caution/forguest.html

[5] 竹内理、水本篤、山西博之、杉田麻哉、中田達也、池田麻生子、田中博晃、印南洋、住政二郎、植木美千子：『外国語教育研究ハンドブック－研究手法のより良い理解のために－』http://mizumot.com/handbook/wp-content/uploads/aabcbcacfd8668f96eb8d560c3c48c6e2.pdf，松柏社，改訂版 2014 年 8 月発行